

学位請求論文審査報告要旨

2012年5月16日

申請者 黄 明侠

論文題目 中国語を母語とする日本語学習者の序列の接続表現の使用傾向に関する実証的研究 ―日本語母語話者との比較を通じて―

論文審査委員 石黒 圭
五味政信
庵 功雄

1. 本論文の内容と構成

複雑な内容の長い文章を日本語で書くとき、「第一に」「まず」などといった序列の接続表現を的確に選択し配列することは、文章構成上重要なことと考えられている。読み手は、序列の接続表現を手がかりに、連続した文字列からなる文章の全体構造をオンラインで読み解いていくからである。

本論文は、このような序列の接続表現を、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国語母語話者とする）がどのように組み合わせて文章の全体構造を構成するのかについて、日本語母語話者の書いた文章との比較のなかで明らかにしたものである。

資料としては、中国語母語話者が書いた説明文と意見文を各 70 名分、日本語母語話者の書いた説明文と意見文を各 70 名分、計 280 本を収集し、比較・分析を試みている。

また、中国語母語話者が中国語で書いた説明文と意見文も各 70 名分収集し、日本語の文章に母語の影響が見られるかどうかについても検証を行っているほか、中国語母語話者・日本語母語話者が書いた文章について、3名の日本語教師による評価も行い、序列の接続表現の選択や配列についての適切性についても検討を加えている。

本論文の目次は、次のとおりである。

第1章 はじめに

- 1.1 研究目的
- 1.2 研究対象を選択した理由
- 1.3 本論文の構成

第2章 先行研究

- 2.1 接続詞の定義
- 2.2 接続詞の分類

2.3	副詞としての扱い
2.4	接続詞と副詞の境界
2.5	中国語と日本語の文と句の接続関係
2.6	文章の構造
2.7	第二言語習得の定義
2.8	第二言語習得の研究方法
2.9	日本語教育における接続表現の使用に関する研究
第3章	研究の方法と資料
3.1	説明文について
3.2	意見文について
第4章	説明文における中国語母語話者の序列の接続表現の選択
4.1	「最初の段階」について
4.2	「途中の段階」について
4.3	「最後の段階」について
4.4	説明文における中国語母語話者の序列の接続表現の選択のまとめ
第5章	意見文における中国語母語話者の序列の接続表現の選択
5.1	「一番目の理由」について
5.2	「二番目の理由」について
5.3	「最後の理由」について
5.4	序列の接続表現の不使用
5.5	序列の接続表現の組み合わせ
5.6	意見文における中国語母語話者の序列の接続表現の選択のまとめ
第6章	中国語母語話者の作文に見られる序列の接続表現使用の問題点
6.1	研究目的
6.2	作文評価に関する先行研究
6.3	調査資料と研究方法
6.4	日本語母語話者と中国語母語話者の作文に対する評価の比較
6.5	中国語母語話者の説明文と意見文に対する評価の比較
6.6	中国語母語話者の作文に見られる序列の接続表現の問題点
6.7	中国語母語話者の作文に見られる序列の接続表現の問題点のまとめ
第7章	本論文のまとめ
7.1	本論文の結論
7.2	残された課題
	本論文のもとになった既発表論文
	参考文献

2. 本論文の概要

本論文は、中国語母語話者が書いた説明文と意見文、二つの作文に出現する序列の接続表現の使用実態について調査・記述し、その特徴と問題点を、日本語母語話者との比較を通して分析・考察したものである。全7章からなる。

第1章では、本論文の研究目的と研究対象を選択した理由が述べられ、本論文の各章の構成が紹介されている。

本論文の研究目的は、中国語母語話者の序列の接続表現について、日本語母語話者との比較のなかで、使用上の類似点と相違点を明らかにし、その使用の適切性を評価することとされる。

とくに、中国語母語話者の序列の接続表現を選択した理由としては、①序列の接続表現がアカデミック・ライティングの分野で重要な役割を果たしていること、②中国語母語話者の作文において序列の接続表現の誤用が多く見られること、③序列の接続表現の選択に失敗すると、読み手が文章の全体構造を把握するのに支障を来すこと、の3点が挙げられている。

第2章では、序列の接続表現に関する先行研究が四つの観点に分けて紹介されている。

第一の観点は、序列の接続表現の品詞的側面である。日本語学の視点から、序列の接続表現が接続詞として扱われているのか、それとも副詞として扱われているのかについて論じられている。

第二の観点は、文の接続と文章構造である。文の接続の観点からは、日本語および中国語の接続関係の特徴について論じられたものが、文章構造の観点からは、序列の接続表現を含む文章がどのように構成されているのかについて論じられたものが、それぞれ紹介されている。

第三の観点は、第二言語習得研究である。ここでは、第二言語習得研究の主要な研究が概観され、量的研究と横断的研究を中心に序列の接続表現の使用状況を分析していくという本論文の立場が述べられている。また、日本語教育における接続表現の使用に関する研究もまた、ここで取り上げられている。

第四の観点は、作文評価である。具体的には、日本語学習者の作文に対する日本語母語話者の評価を調査した先行研究を中心に検討されている。

第3章では、調査の方法と資料について紹介されている。

調査の対象である作文のテーマとして取り上げられたのは、「料理の作り方」と「割り勘の賛否」である。テーマ選択の理由は、誰もが経験のある身近なテーマが望ましいと考えたためとされている。また、前者は、自分が知っていて相手が知らない内容を正確に伝えるという説明文の基本的な性格を、後者は、自分と立場を異にする相手に根拠を示しながら主張するという意見文の基本的な性格を備えていることも指摘されている。さらに、パイロット調査の結果、この二つのテーマが比較的安定して序列の接続表現が現れた点も選択の理由になっている。

調査対象者は、「料理の作り方」「割り勘の賛否」というそれぞれのテーマにたいし、日本語母語話者と中国語母語話者、各 70 名となっている。日本語母語話者は日本国内の大学に在籍し、文系学部にも所属する学部 2~4 年生で、中国語母語話者は中国国内の大学に在籍し、日本語を専攻する学部 2~4 年生である。中国語母語話者は、その学習歴を確認し、旧日本語能力試験で 2 級の目安とされている学習時間 600 時間以上の授業時間を経ている学習者のみが対象とされている。

調査の具体的な方法は、説明文・意見文とも、同一のテーマについて、日本語母語話者には日本語で、中国語母語話者には日本語と中国語で作文を書いてもらうという形が取られている。なお、中国語と日本語、どちらを先に書くかについては、特に指示はされず、中国語母語話者それぞれの判断に委ねられている。作文は手書きで書くように指示され、制限時間は設けられていない。

第 4 章では、説明文における中国語母語話者の序列の接続表現の選択について、日本語母語話者との比較を通じて、それぞれの類似点と相違点が分析・考察されている。

説明文の調査結果としては、料理の作り方の手順の最初の段階と最後の段階を説明する場合、日本語母語話者と中国語母語話者の作文に現われる序列の接続表現の選択は比較的似た傾向があり、「まず」と「最後に」が最も多く使用されていた。しかし、調理の途中の段階を説明する場合、日本語母語話者は「次に」を、中国語母語話者は「それから」を最も多く使用し、それぞれ選択した序列の接続表現に異なる傾向が見られた。

また、同じテーマについて中国語で書いた作文との比較をとおして、中国語母語話者の日本語作文に出てきた序列の接続表現の選択の特徴は、辞書の影響と学習者の母語である中国語と密接な関係があることが示唆された。

第 5 章では、第 4 章と同様に、日本語母語話者の作文と対照しながら、意見文における中国語母語話者の序列の接続表現の選択の特徴が明らかにされている。

意見文の調査結果として、説明文よりも意見文のほうが、日本語母語話者と中国語母語話者の序列の接続表現の異なりが大きいことが明らかにされた。

日本語母語話者は「一つ目」系列と「第一」系列という組み合わせを多く使用していたのに対し、中国語母語話者は「一つ目」系列と「第一」系列をあまり使用せず、主に「まず」系列を使用していた。つまり、日本語母語話者は、ジャンルによって序列の接続表現の系列を変えたのに対し、中国語母語話者はジャンルに関わらず同じ系列を選択していたことがわかった。

また、中国語母語話者の作文の中に出てきた序列の接続表現の系列選択は、中国国内で使用されている日本語教科書の影響だけでなく、同じテーマで書かれた母語による作文との比較検討の結果、母語である中国語の影響を受けていることが示唆された。

第 6 章は、第 4 章、第 5 章で扱った説明文と意見文を読んだ日本語教師の評価に基づき、中国語母語話者の作文における序列の接続表現の使用にはたして問題があるのか、問題があるとすればどこにあるのか、その背後にある原因を探ることを目的とした章である。

評価は、大学院で日本語学を専攻し、現在、教壇に立っている日本語を母語とする日本語教師 3 名が、今回収集したすべての説明文と意見文を対象に、①「使用された序列の接続表現は形態面で自然か」、②「使用された序列の接続表現は文法面で自然か」、③「序列の接続表現の出現位置は適切か」、④「序列の接続表現が二つ以上使用された場合、その序列の接続表現の組み合わせは適切か」、⑤「序列の接続表現が二つ以上使用された場合、序列の接続表現によって導かれる内容がそれぞれ対等なものとして理解しやすいか」、⑥「列挙された内容が何の列挙であるか示されているか」、⑦「文章の全体的な構造はわかりやすいか」という 7 項目についてそれぞれ 5 段階で判定したものである。

調査の結果、すべての項目で中国語母語話者は日本語母語話者の総合平均を下回っており、とくに⑦の評価が説明文・意見文ともに低く、文章の全体的な構造に大きな問題点があることが明らかにされた。また、説明文よりも意見文のほうが日本語母語話者のものと比較して差が大きいことも示された。

そして、その背景には、選択された序列の接続表現の文法面での不適切さを筆頭に、序列の接続表現の形態に対する母語の干渉、序列の接続表現の出現位置やその組み合わせ、さらには序列の接続表現によって導かれる内容の対等性や、列挙の予告が不十分であるといった要因が絡み合い、読み手の文章理解を阻害している姿が明らかになった。

7 章では、上述の内容が本論文の結論としてまとめられ、また、残された課題について述べられている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、以下の 3 点にまとめられる。

第一は、これまでの研究のなかで、論文・レポートなどを書くさいに重要で、かつ、問題が多いとされてきた日本語学習者の序列の接続表現について実証的な調査をおこない、中国語母語話者と日本語母語話者との違いについて明らかにしたことである。

先行研究は問題の指摘に留まっており、使用の実態にまで踏みこんで研究をおこなったものはなかった。その意味で、延べ 280 名を対象に一定の規模の調査をおこない、その実態を記述したこと自体、高い資料的価値を有すると考えられる。

第二は、説明文と意見文という異なるジャンルにおいて、序列の接続表現の出現の違いを明らかにしたことである。

日本語母語話者が書く場合は、説明文では「まず」系列を用い、意見文では「第一」系列、「一つ目」系列を用いる一方、中国語母語話者が書く場合は、説明文でも意見文でも「まず」系列を選択するという違いを指摘したことは、できるだけ負荷をかけずに脳内で情報を整理するあり方が母語話者と学習者で異なるということを示唆しており、今後、談話分析研究や中間言語研究、認知心理学的研究に大きな貢献をもたらす可能性を秘めている。

第三は、序列の接続表現の選択について、第三者の評価からその問題点を整理したことである。

文法性判断には人によって幅があり、揺れることが普通である。序列の接続表現のような文連続に関わる問題はとくにその揺れの幅が大きい。そのため、本論文では、ある特定個人の文法性判断に依拠するのではなく、3名の日本語教師による文法性判断を収集し、それを統計的に分析するという手続きを踏んでいる。その結果、序列の接続表現の選択について、従来の研究にくらべて信頼性の高い判断が可能になっており、それが本論文の客観性を高めている。

このように優れた面を備えた本論文であるが、問題点もいくつか存在する。

第一の問題点は、序列の接続表現にかぎって考察したため、序列の接続表現が現れない作文の文章構造がどのようになっているのかがわからない点である。

本論文の調査では、序列の接続表現が出やすいテーマに絞って扱ったわけだが、現実の文章では、序列の接続表現を使わずに列挙されることも多い。また、序列の接続表現が使われていても、じつは、それ以外の要素もまた列挙の文章構造を支えるのに効いている可能性もある。そうした序列の接続表現以外の列挙の方法について、今後さらに考察を深めていく必要がある。

第二の問題点は、「料理の作り方」で説明文を、「割り勘の賛否」で意見文を代表させている点である。たとえば、自己の経歴を語る場合、「まず、私は前橋市で生まれ、次に、高崎市に移りました。」とは言わず、「私は前橋市で生まれ、{それから/その後}高崎市に移りました。」と言うはずである。そのように考えると、説明文にも、本論文には現れてこなかった、いくつかの類型が考えられるのではないだろうか。

第三の問題点は、研究の手続き面にやや慎重さを欠く面があった点である。本論文を、第二言語習得研究として考えた場合、学習者にレベルの差を設定しておいたほうが、習得のプロセスがはっきりと見えたであろうし、日本語と中国語、どちらから先に書くかを同数にしておけば、母語の影響がより明確になったはずである。また、本研究ではフォローアップ・インタビューがおこなわれているが、そのことが論文の記述に十分に反映されていないので、考察の根拠が弱く見えてしまったうらみがある。

しかし、上述の問題点は、本論文がもたらした、豊かな学術的成果の価値を大きく損なうものではない。また、こうした問題点については、本論文の筆者にも十分な自覚があり、筆者の今後の活躍によって克服されることが期待される。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭
五味政信
庵 功雄

2012年4月19日、学位請求論文提出者、黄明侠氏の論文「中国語を母語とする日本語学習者の序列の接続表現の使用傾向に関する実証的研究 ―日本語母語話者との比較を通じて―」にかんする疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのにたいし、黄明侠氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、黄明侠氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。